

本庄睦男、『石狩川』をめぐって

根岸隆尾(校長)

「生きるための彼のいとなみが、そのまま彼の全人間を生かすための道と一つになってゐるやうな状態、多くの人々がそれを求めてゐる。駿介もそれを求めてゐる。」

(島木健作『生活の探究』)

人は誰しも、特に青春期においては、駿介ならずとも、職業と本来の仕事との対立や不一致もなく、完全に自分を生かせる第一義の道を激しく求めていよう。しかし、自分の願望や意志如何にかかわらずこれまでの生を支えた物質的基盤、精神的拠り所が、一朝にして失われたとしたら、人はどう生きるか。

本庄睦男の『石狩川』(昭和14年刊)は、明治維新に達着し、奥州戦争に敗北して徒手空拳蝦夷地北海道の原始林に挑んだ旧武士集団の苦闘を描いた歴史小説である。

明治元年、奥州連盟の盟主として官軍と戦った仙台藩に、明治政府は厳しい処罰を下した。その支藩である岩出山藩にいたっては懐槍を極めた。旧一万五千石は文字通り一朝の夢と化し、藩主伊達邦夷は六十五石の俸祿に落ちていた。土籍を剥奪された家臣七百六十余名は、数千の家族とともに一挙に「土民」

となされ、路傍に投げ出された。土地や家屋は没収され、彼らは身の置き場を失った。

「悲憤や怨嗟をととのえる余地も置かせない処分であった。そこで思ひはこの蝦夷地に走つたのだ。云はば新たに、死ぬべき場所を捜さねばならぬ場合に立ちいたつていた。」

そこで、旧藩主邦夷は、「膝を屈し、恥をさらけだして」新政府に歎願したのだ。「頓首再拜つしんで歎願奉り候、…死力をつくして開拓つかまつるべく、御用途多端のことにござ候へば、何分にも自費をもつて開拓仕り、千辛万苦、死力をつくし、…前罪の万分の一にても相償ひ申したく、云々と。なんとしても「起死回生」の地を獲たい一念であった。この旧主の想念を身を挺して実現していったのは、移住計画の主事に任せられた元家老の阿吾妻謙であった。

明治三年三月、邦夷以下四十数戸、総勢百六十名の入植したシップの地は、石狩河口を距ること半里であったが、何ひとつ実らず、針葉樹も満足に育たない不毛の地であった。はじめに知る長い互寒の雪に埋もれて、家中の不満は徐々に醸成されていった。「藩の重役どもが、今荒野の中に連れ込んでのたれ死に

導いてゐる!」。彼ら一統を結びつけていたのは、「何百年來培われて来た親子のやうな藩主と家臣の情宜」であった。しかし、既に、藩主と家臣という封土人民の私有関係、俸祿授受の関係が実質的に崩壊している以上、その家中という觀念も幻想と化そうとしていた。今阿吾妻にとつて焦眉の急は肥沃な土地を獲ることであった。

前人未踏の原始密林の踏査は辛酸を極めた。方向を見失い、二三日の予定が延び、食糧が欠乏し、それを購いに遣わされた少壮の武士と漁夫上がりの案内人は、折からの雨で増水した石狩川の泥流に飲み込まれ溺死した。その犠牲の上に見いだした土地はトウベツ(当別)であった。その当別は、巨木鬱蒼と天地を覆い、芦葦茫茫と茂り、目の極まる限り坦々とした原野が続く、その底を石狩の支流当別川が流れていた。シップを去ることおよそ六里の肥沃な地であった。家中の命運はこの土地の貸し下げの成否にかけられていた。

阿吾妻は、死を決して札幌の開拓使庁舎に向かった。交渉する相手は、「軍門に降つたとは云ふものの、一度は憎しみをもつて対峙した薩摩の人間であつた」。そして、官員の行動は絶対であり、官員だけが「人間としての待遇」を受けていたのだ。開拓使との対決、しかし、意外にも講願は、開拓使堀大主典にあ

つさりと受け入れられた。それは、「速に北渚道を経営するは、今日開拓の急務にして」という新政府の方針に合致していたに過ぎないからであった。

しかし、この朗報を持ち返った阿吾妻を待っていたのは、賄い方を一手に引き受けてきた一人の男の自決した姿であった。彼は、購入した食糧を函館廻送の船に托した。が、その船は不明になってしまっていたのだ。武士として責任を取らずにはいらなかったのだ。作物の実らぬこの地にあつて、彼の自決は飢餓の宣言を意味していた。ここに立ち至つて家中の人々の心情は激しく揺れ動いた。阿吾妻は、厳しく責め立てられる。北海道入植そのものの失敗を、また、「一蓮托生」と言った阿吾妻の倫理を。鬱勃たる心を抱いていた若者安倍誠之介は言つ。

「人は平等を宣言されたのに、しかし、われらのところでは、実のない君臣の名に縛られて、この広野に、あてのない彷徨をつゞけてゐる。解放してやらねばなりませんよ、阿吾妻さん?」「まづ郷里おくりかへして、」聞くところによれば、新政府は人を欲してゐることごとく、「云々と」。

しかし、この「君臣の名」の呪縛からの解放・帰郷と官途につく自由・を、阿吾妻は認めることはできない。彼にとつて「屈辱なく死を托すに足る土地」、蝦夷地集入植は絶対

的選択であり、汚名挽回を越えた武士としての意地でもあつた。それを貫くために「君臣の名」のものと「心の紐帯」は、集団の命運にかかわる倫理であつた。

阿吾妻は、現実を打開するために即刻動いた。それは先ず第一に、当座の食糧購入費を得るために、開拓使と掛け合つて石狩の税庫建築を請負うことであつた。夜道を急ぐ一行は、意外にも、開拓使堀大主典に出会つた。堀は、「お国のため」にオロシャとの交渉に赴く気骨ある武士を求めて阿吾妻らのいるシツブへ急遠来るところであつた。阿吾妻は、堀に税庫建築の請負を強引に承諾させ、その上で安倍誠之介を名指した。安倍は国家の官僚として樺太へ赴くことになつた。安倍も轉身でき、集団の紐帯も保たれたのであつた。こうしてトウベツの開拓は緒についた。税庫建築を請け負えたのは、下級武士の常断の生活が、「大工、左官、傘張り、提灯貼り、建具、経師」などの仕事をするることによつて成り立つていたからであつた。それが下級武士の実態でもあつたのだ。

トウベツ開拓の目途がついたとき、郷里から、残した家中のものを連れてくることになつた。旧主と阿吾妻ら五名は、いったん郷里に戻つた。十数ヶ月の長い時間が経過していた。時世も変わり、郷里の人々にも「はゞかすることなく呼吸づけさうな世間」になつてい

た。阿吾妻は、安易に時世に迎合しようとする一統とも闘わねばならなかつた。それを乗り越え、更に、集団移住資金の貸下げを交渉しなければならなかつた。もはや集団移住は認められなかつた。資金は一人一人の個人に与えられた。「金のことであるならば」結果は同じでも、その精神においては「雲と泥」の差があつた。阿吾妻は、「家中の一団が、そのとき紐帯を断たれ、個々ばらばらにきり離され、一人一人が直接開拓使庁即ち政府に結びつけられてしまつたと感じた。しかし、結局それを受け入れざるを得なかつた。

阿吾妻を支えたのは、再生への情熱であつた。しかし、その再生は、かつて敵であつた新しい支配者の扶助がなければ達成できない屈辱を伴うものであつた。しかし、それを耐えることによつて、「誰にも妨げられることなく彼らは、彼らの意のままに、すべての膂力と意志を傾けてたゞかふことが出来る」、そして「さむらいの本望」を賭けられる「汚れない処女地」を得たのだ。

作者本庄睦男の父一興は、旧佐賀藩士であり、明治二八年渡道して当別に入植し、開拓農民となつた。『石狩川』は、その地の歴史に埋もれた「父祖の思ひ」を描くと同時に、昭和十年代の厳しい時代状況の中で、自らの生き方を探ろうとする意志と情熱を塗り込めた作品でもあつた。